

# 育心

発行責任者：秦野市教育研究所長 杉山 哲也

発行日：平成25年7月12日

秦野市教育研究所

住所：秦野市桜町1-3-2

電話：0463-81-2125

e-mail：k-kenkyu@city.hadano.kanagawa.jp

URL：http://www.city.hadano.kanagawa.jp/

k-kenkyu/kenkyu.html

## 子どもを奥深くとらえる

～南が丘中の授業研究会で考えたこと～

教育研究所長 杉山 哲也

先日、南が丘中学校で公開授業研究会が行われ、南が丘中学校の先生たち以外に、講師、秦野総合高等学校や群馬県の市立中学校の先生等が、授業を参観した後、授業研究会に臨みました。よく見かける授業研究会は、授業者が自評を行い、参観者が教師の発問、授業の進め方、教師の手立て等について発言をしていきます。

しかし、今回の授業研究会は、そうした進め方をしませんでした。発言者は、授業の中で子どもたちのやりとりや表情・しぐさ等を語り合います。「子どもたちにとって、この学習活動にどんな意味があるのか、どんな学びが生まれているのか」を探るスタイルです。

実は、このスタイル、けっして新しいものではありません。私が初任の頃（今から30年前）に全国各地で研究に取り組む多くの学校では、そうした手法がとられていましたし、それ以前にも行われていたといえます。私の経験では、授業者が最後までほとんど語らない（つまり質問も受けない）という研究会もあったほどです。

授業をした先生が、参観者の発言によって、子どもたちの学びを知ることができるのが、今回の南が丘中のスタイルです。授業者は、自分が気付かなかった子どもたちのつぶやきや発言、交流の様子を、参観してくれた先生から具体的に聞くことができます。VTR再生で一人の子どもの言動を参観者が語り合います。「どうしてこの時、A君は横を向いたままなのだろう？」

授業研究会とは、教師の指導のあり方の良し悪しを検討するだけの活動ではなく、子どもたち一人ひとりを奥深くとらえるための活動でもあるのです。

教科の授業だけではない、日常生活で見せる子どもたちの言葉・表情・しぐさも「子どもを奥深くとらえる」ための大切な要素となるのです。

もうすぐ1学期が終わります。私たちは、一人ひとりの子どもたちをどこまで深くとらえることができただでしょうか？そして、子どもたちにどんな働きかけをしてきたでしょうか？あなた自身を見つめることも含めて、「奥深くとらえる」努力を重ねたいものです。

## 一貫教育を見据えた6研究部会が発足

外国語、キャリア教育、防災教育など4教科・2領域で研究を進めます

4月26日金曜日、秦野市役所西庁舎3階会議室において、平成25年度の研究員委嘱式が開催され、内田賢司教育長から研究員一人ひとりに委嘱状が手渡されました。

今年度は6部会27名の研究員により研究活動を進めてまいります。昨年に引き続き、各教科では幼小中一貫教育を見据え、そのあり方に迫る研究内容がテ

ーマとして掲げられています。昨年度の成果を踏まえ、幼小中一貫した防災教育研究紀要の検証と実践のあり方を研究する部会、また子どもたちの「生き方」に深く踏み込んでいくキャリア教育のあり方を研究する部会も発足しました。研究概要や研究員については次のとおりです。（敬称略）





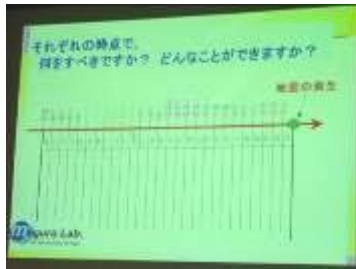
一資料より一

目黒メソッド

- 1 徹底した当事者意識
- 2 個人としての多面性の認識
- 3 健常者一潜在的災害弱者の認識
- 4 自分の死後の物語をを考える
- 5 極端なケースを想定する

目黒巻 Work Shop の進め方

- 1 発災条件(季節、天候、時間、自分たちの活動状況、服装など)と対象期間(発災後いつまでを対象にするか)などの条件を設定する。
- 2 各自が自分を主人公とした物語を書き進める。
- 3 2を進める上で生じた疑問を「疑問カード/ノート」に書き出す。
- 4 各自の物語が完成したら、まず皆の「疑問カード/ノート」を見せ合って問題を共有するとともに、それを調べ、解決する。
- 5 各自の物語を並べ、各時間帯で相互に矛盾がないかを確認し、おかしい部分がある場合にはそれを修正する。
- 6 各自の活動を見直し、最終的な結末をより良い状況にもっていくには、どんな判断や行動をすべきであったかを考え、物語を修正する。
- 7 さらに、地震の発災前に、5秒、10秒、数時間、1日、1か月、1年・・・など、長さの異なる時間が与えられた場合に何をすべきかを議論する。



私(目黒教授)の考える重要なポイント

- ・ 自分が地震で亡くなってしまおう状況をイメージしてください。何を最も重要な教訓として、遺族に、大切な仲間へ伝えたいですか。
- ・ 一般的に、政治家は、被災地で生き残った人々(選挙で投票できる人々)に注意を払う。しかし、これは防災の本質とは違う。
- ・ 有限な資源やエネルギーは、災害発生時に被災する人々を減らすために、まずは事前に使うべきであり、被災地で将来発生するであろう人々のケアのために残しておくものではない。

参加者の主な感想・意見等

- ・ 発達の段階に応じた学年別の指導事項が整理されており、具体的な活動内容やねらいが大変参考になりました。また、多岐にわたる内容を幼小中と系統性を持たせて身につける準備が整いつつあることがすばらしいと感じました。ただ、地域の特性を踏まえた上での防災意識向上に向けての具体にもう少し触れてもよかったのではないのでしょうか。その点を踏まえて、今後の実践の成果についてもぜひ報告してほしいと思います。
- ・ 一人ひとりが何をすべきかということを、専門の立場から実効性のある防災教育について、またその重要性について強く感じました。子どもも教師も災害に対するイマジネーション能力を高めていかなければいけないと感じました。子どもに防災を学ばせるためにはまず自分がもっと学ばなければいけないと思いました。時間をもっとかけて聞きたい内容でした。

研究成果を教育活動に活かそう!

~6冊の研究成果物を刊行・配布~

平成24年度の研究部会は、小中一貫教育(国語)研究部会、小中一貫教育(算数・数学)研究部会、小中一貫教育(保健体育)研究部会、幼小中一貫防災教育研究部会、学校情報化推進研究部会の5部会で研究を進めてきました。また、自主研究レポートについても3名の方が1年間それぞれの研究テーマに取り組んできました。これまでに、各研究部会よりその研究成果物が各幼稚園・こども園、小中学校に配布されています。ここではその概要についてご紹介いたします。



